

内外交差点

廃城令と同じ轍を踏んではならない 「タクシー+観光」の可能性⑤

森田 玲子氏（姫路タクシー社長） 第5/12回

日本には5つ、国宝の城がある。

松江城（島根県）、姫路城（兵庫県）、彦根城（滋賀県）、犬山城（愛知県）、そして松本城（長野県）である。現存する12天守の中でもこれら5城は文化財としての重要性は極めて大きく観光に訪れる人も当然多い。2000年前後の築城400年ラッシュや2013年に竹田城がグーグルのCMに採用された辺りから城ブームは熱く続いている。私は8月、初めて松本城を訪れた。

松本市と姫路市は1966年に姉妹都市提携を締結している。又、先日もお話したように2022年からは広域都市連携を5都市（北九州市・福山市・倉敷市・姫路市・松本市）と結んでいるご縁の深い土地である。今回は商工会議所観光委員会の視察ということで、観光の面で協力的な取り組みができないかを探る旅であった。

松本市へは神戸空港からの夕方便で1時間弱（もう1本は朝便）という便利さであり、何より良かったのはどちらの空港も鉄道の駅に比べるとかなり空いているのだ。松本の爽やかな空気も相まって快適な移動である。旅の目的は観光名所を観たり、美味しい郷土料理を食べたりがメインではあるが、「移動」がその旅に与える印象は大きい。これが困難であれば、その旅自体がなくなってしまう可能性すらあるが、単なる「移動」でない付加価値がつけばどうであろうか。そんなことを思わせるタクシーの運転手さんに出会った。

その夜、委員会で食事をした後、ホテルまで送ってくれたタクシーでそのまま出かけた。私はどこかへ出かけたらできる限りタクシーに乗るようにしていて、その土地のタクシーの状況や流行のお店、タクシーに乗っていて良かったと思うことなどをお喋りしながら伺う。今回は1時間くらい時間があったので、松本城とその周辺部のお勧めスポットをリクエストした。

まず松本城に一番近付ける地点でタクシーを停めてくださり「こちらから歩いて入って行かれたら綺麗な写真が撮れますよ」と教えてもらった。実際、静謐の

美しさを讃えた黒い城がそこにあった。毎日の通勤は姫路城の前を通っている私にとって美しい城は日常であり、初めての松本城は大変楽し

みではあったが、正直そこまで大きな期待はしていなかった。が松本城、正にこれは日本の宝だと思った。惚れ惚れとライトアップされた城を巡りながらあることに気付く。姫路城と同じ、人が殆どいないのだ。SNSで一番よく目にするアングルの撮影場所まで15分ほどゆっくりと歩いたが、数人の外国人と数人の日本人にしか会うことはなかった。ここは松本市、姫路市ともにナイトアミューズメントの潜在能力をより認識し、タクシーが役立てる点を我々はアピールしていかななくてはならないと痛感した。

その後、国宝開智学校（車のライトで校門の看板を照らしてくれた）～太鼓門（下車して説明してくれた）～縄手通り・中町通りの町並みを案内してもらった。彼は58歳、夜日勤で特別な観光の研修を受けているわけではなかったが、これほどのガイドはないというレベルの高さであった。最も印象的だったのは言葉の端々に「地域愛」を感じる車内での会話である。例えばセイジ・オザワ松本フェスティバルについて伺うと、心から故・小澤征爾さんに感謝されていた。彼のお陰で松本は3ガク都になりえたと。これは雄大な山々を擁する「岳都」、開智学校など昔から教育を重んじる「学都」、そして音楽の街「楽都」である。松本の土地が好きだからこそ相手にその良さが相乗効果をもって伝わるということを実感した。

翌日、青空の下の松本城は全く違った表情で私を迎えてくれた。美しいものは昼も夜も観るべきであると心を新たにした。少し出来た自由時間に昨夜の運転手さんが教えてくれた「喫茶まるも」を訪ねた。ホフマンの舟唄が流れる民藝麗しい店内に冷たい珈琲、なんという贅沢か。改めて昨夜の運転手さんに感謝する。

明治維新の時点で193基あった城は明治の廃城令や戦災、紆余曲折を経て、現存12基の天守を残すだけになった。昨夜の運転手さん然り、タクシーは日本の文化と言っても過言ではない。近頃ではNRSの話題ばかりであるが、まかり間違っても日本のおもてなし文化体现のタクシーが、かつての天守のように失われるようなことがあってはならないと思う夏の夜であった。

